

「生存のエシックス」展評

吉岡洋（京都大学教授）

美術館に行く。それは何かを「見る」ためだと、私たちはふつう考える。美術館には「作品」が「展示」されており、企画者や専門家による「解説」があるだろうと期待しているのである。

もともと現代美術では、「作品」は絵画や彫刻といった伝統的な形をしているとは限らない。アーティストは、あえて何も作らないかもしれない。それでも私たちはその空白を「見る」ように促されるし、そこに何らかの思想 — たとえば作者はそれによって「美術館」や「作品」そのものを疑問視しているのだ、というような — を読み取るのである。やはり美術館に行くのは何かを「見る」ためなのだ。

展覧会『生存のエシックス』は、いわばこうした「見る」という枠組みの向こうへと歩み出ようとする試みだと言える。その意味において、本展が国立近代美術館で開催されたことの意味は大きい。

美術館前では炎天下、竹で組んだ円筒形の枠に泥を塗り込む作業が進行している。完成すると一週間だけ浄化した疎水の水が飲めるカフェとなり、その後は撤去される。館内に入ると、ボランティアスタッフが二万五千枚の写真を貼り合わせて何か巨大なオブジェを制作中である。これらは中ハシクシゲと井上明彦による「水のゆくえ」というプロジェクトである。

3階の展覧会場に上ると、微少重力環境において植物を育て「宇宙庭」を作るという、宇宙航空研究開発機構（JAXA）との共同研究、蜂の嗅覚を用いて人間の病気を診断するスサーナ・ソアーズのプロジェクト、自作のマイクを使って生態系の中の音を採取するデビッド・ダンの「バイオ・ミュージック」などの科学的な展示があるかと思うと、現代の生物テクノロジーを扱った「遺伝子組み換え劇場」（クリティカル・アート・アンサンブル）や世界各地のデモや集会の映像を記録したアルトゥール・ジミエフスキの「デモクラシーズ」のように政治的意図の明白なもの、さらには高橋悟と松井紫朗による「二重回転マシン」や、裸足で木製の山に登る「盲目のクライマー／ライナスの散歩」（石原友明＋中原浩大）、脳の血流変化をフィードバックする「光・音・脳」（森公一）といった、身体や知覚について問い直す装置もある。

作品を「見る」ために美術館を訪れた人は、それらが未完であり進行中であることに戸惑いを感じるだろう。これらは美術館に展示すべきものなのだろうか？ そもそも「生存のエシックス」とはいかなるコンセプトなのだろうか？ 本展の核心は、まさにそうした問いを未完のまま提示することにある。実際、会期中には夥しい講演、ワークショップ、シンポジウムが開かれ、それらの問題をめぐって活発な議論が行われたのである。

この試みを私は評価したい。なぜなら今日では美術においてすら「集客力があり予算要求しやすい企画」が大きな顔をしており、そのためなら「何でもアリ」というような諦めムードが広がっているからだ。美術館にはまだ出来ることがあるという明確な主張を、この展覧会に感じた。